愛媛大学教育学部紀要　第65巻　199～210　2018

フランティシェク・クサヴェル・ドゥシェクのパルティア

～ドゥシェクの生涯と同時代の作曲家～

（音楽教育講座）市川克明

"Harmoniemusik" by František Xaver Dušek

– Life and contemporaneous composer –

Katsuaki ICHIKAWA

（平成 30 年 6 月 29 日受理）

はじめに

2017 年８月から 11 月初頭までプラハに滞在し、ヴィンツェンツ・マシェク Václav Vincenc Mašek (1755-1831) の独奏ピアノを含む管楽パルティアの作品研究を行った[1]。その際、チェコ国立博物館付属音楽図書館所蔵のパフタ伯爵家に所蔵されていた手稿楽譜の調査を行った。同伯爵家のハルモニームジークは、18 世紀後半、ヴィーン、シュヴァルツェンベルク、ドナウエッシンゲン、ヴァラーシュタインなどの宮廷と並び重要な役割を果たした。ハルモニームジークは、1760 年前後に発生し、1840 年頃には軍楽隊などの吹奏楽に変容していく管楽アンサンブルを指すが、内声である２本のホルンを中心に、オーボエ、クラリネット、ファゴットをそれぞれ２本ずつ用いる編成が「比較的」標準である[2]。特に、1782 年に成立したヴィーン宮廷の「ハルモニームジーク」は他の地域のモデルとなった[3]。

本稿では、マシェク同様 18 世紀後半プラハの音楽活動を先導し、また彼の師でもあったフランティシェク・クサヴェル・ドゥシェク František Xaver Dušek (1731-1799) の生涯と管楽パルティア（ハルモニームジーク）に焦点を当て、18 世紀後半のプラハの音楽界で彼の果たした役割、そして、とりわけ同地の有力貴族家で好まれた管楽アンサンブルのレパートリーについての研究成果を紹介する。

１．フランティシェク・クサヴェル・ドゥシェク

フランティシェク・クサヴェル・ドゥシェクは、18 世紀後半、主としてプラハにおいて重要な役割を果たした、音楽家、教育者、ピアニスト、演奏会企画者としてよく知られている。また、彼の夫人であるヨセファ・ドゥシュコヴァー Josepha Dušková (1754-1824) も、この時代を代表するソプラノ歌手として広範囲で知られていた。

わが国を含め、ドゥシェクはしばしば類似する名前の別の作曲家、音楽家と混同されることが多かった。初めに、別の作曲家に取り違えられたケースについて述べる。

ヤン・ラディスラフ・ドゥシーク（ヨハン・ラディスラウス・ドゥセック） Jan Ladislav Dusík (1760-1812) は、日本でもよく使用されているソナチネアルバムにも登場するピアニストである。同国人でもあり、名前が類似しているため、混乱の原因となっている。F. X. ドゥシェクも J. L. ドゥシークも国外では Dussek と綴られることもあり、この場合発音はドゥセクである[4]。しかし、J. L. ドゥシークは F. X. ドゥシェクのように Dušek とは綴られてはいない[5]。したがって、ヤン・ラディスラフ・ドゥシェクとの標記は基本的には誤りである。ドイツ語圏でも両者の混同は起こっており、とりわけ、J. L. ドゥシークが F. X. ドゥシェクに間違えられることが多いようである[6]。また、J. L. ドゥシークの家系には音楽家が多く、注意が必要である[7]。

また、フランティシェク・ドゥシェク František Dušek (1780-1844) と混同されることも多い。フランティシェク・ドゥシェクは、チェコ北東部のドルニー・ドブロウツ Dolní Dobrouč 生まれ、同地で没した、聖歌隊指揮者、宗教音楽作曲家である[8]。

ドゥシェクの生涯

F. X. ドゥシェクは 1731 年、現在のポーランド国境に近い北東ボヘミアの小村ホティエヴォルキ Chotěborky u Jaroměře に生まれた。芸術を愛する領主シュポルク伯爵家の、とりわけヨーハン・カール・シュポルク Johann Karl Sporck (1722-1790) の庇護のもと、フラデツ・クラーロヴェー Hradec Králové にあったイエズス会ギムナジウムで音楽を含む教育を受けた[9]。その後、プラハでフランティシェク・ヴァーツラフ・ハベルマン（フランツ・ヨーハン・ハーバーマン） František Václav Habermann (1706-1750) に、ヴィーンでゲオルク・クリストフ・ヴァーゲンザイル Georg Christoph Wagenseil (1715-1777) に師事、1770 年にプラハに戻った。1776 年、弟子の一人であった、ヨセファ・ハムバッヒェル（結婚後はドゥシュコヴァー） Josepha Hambacher / Dušková (1754-1824) と結婚した。後に、夫妻はプラハのスミーホフ地区のベルトラムカ荘に居を構え、18 世紀の後半、様々な音楽アカデミー・演奏会を企画し、多くの音楽家が同家を訪れるなど、プラハの音楽活動の中心となった。とりわけ、モーツァルトとの関係は有名で、アリア "*Ah, lo previdi – Ah, t'invola agl'occhi miei*" KV 272 をヨセファ・ドゥシュコヴァーのために作曲[10]、その後も夫妻はモーツァルトと親しく交流し、1787 年、1791 年に２度、合計３回のプラハ訪問の様子はよく知られている。

ドゥシェクは、最晩年、貧困と健康の問題が強まり、1799 年２月 12 日に肺水腫により死去し、マラーストラナ（小地区）の聖ミクラーシュ教会で、弟子の一人でもあるヴィンツェンツ・マシェクの指揮のもと執り行われた[11]。彼の死後わずか 14 年後に出版されたゴットフリート・ヨーハン・ドラバチ Gottfried Johann Dlabacž (1758-1820) の音楽事典には死去すぐに書かれた「新プラハ新聞」Neue Prager Zeitung 1799 年 第 14 号 154 ページ の記事が引用されドゥシェクに関して細かく記されている[12]。その中で、「ボヘミアはフランツ・ドゥセック氏、その最も有名な作曲家の一人を失った。」"*Böhmen verlor an Hrn. Franz Dussek einen seiner berühmtesten Tonkünstler.*" とその死を悼んでいる[13]。

ドゥシェクの活動の中心は音楽教育であり、弟子の中にはプラハの有力な貴族だけではなく、マシェクの他、ヴィーンで活躍した作曲家レオポルド（ヤン・アントニーン）・コジェルフ Leopold (Jan Antonín) Koželuh (1747-1818)、当時、プラハの作曲家、ピアニスト、音楽理論家、音楽教育者としてよく知られたヤン・ネポムク・マーチャシュ・アウグスティン・ヴィターセク Jan Nepomuk Matyáš Augustin Vitásek / Wittassek (1770-1839) などがおり、ドゥシェクが優れた教育者であったことを示している[14]。ドゥシェク夫妻の墓は、ヴルタヴァ川の西岸、マラー・ストラナ地区の南側、夫妻の別荘ベルトラムカ荘のすぐ近くのマロストランスカー墓地 *Malostranský hřbitov* にあり、C 区画に 1956 年に石碑が立てられた[15]。

ドゥシェクはシンフォニー、コンチェルト、室内楽などを残し、その多くはプラハの音楽図書館に所蔵されている[16]。

２．ドゥシェクとモーツァルト、ベートーヴェン

モーツァルトとプラハ、ドゥシェク夫妻

ドゥシェク夫妻とモーツァルトの関係はよく知られている。ヨセファ・ドゥシュコヴァーはザルツブルク出身のソプラノ歌手で、1777 年、夫ともに故郷に戻っていた彼女はモーツァルトと知り合い、それがきっかけとなりレチタティーヴォとアリアおよびカヴァティーナ「ああ、私は前からそのことを知っていたの！」"*Ah, lo previdi*"、「私の目の前から消え去っておくれ」"*Ah, t'invola agl' occhi miei*"、「ああ、この波を越えて行かないでください」"*Deh, non varcar quell' onda anima del cor mio*" KV 272 が誕生した[17]。その後も、ドゥシュコヴァーはモーツァルトの声楽作品の紹介に務め、コンサートアリアのみならずオペラの中の曲も演奏会で取り上げた。それ以来、モーツァルトはプラハ滞在中、しばしばドゥシェク夫妻の別荘「ベルトラムカ荘」に滞在している。

プラハでは、1783 年に歌劇「後宮からの誘拐」 "*Die Entführung aus dem Serail*" KV 384 が上演されて以来、モーツァルトは非常に高く評価され、歌劇の上演は常に成功を収めたが、とりわけ重要なのは、「フィガロの結婚」 "*Le nozze di Figaro*" KV492 の成功である。1786 年末にプラハで再演された際には、「フィガロの結婚、このイタリアオペラ、これほどまでに注目を集めた作品はない。ヴィーンでこのオペラを見た識者たちは、『口々に、この上演ははるかによい結果をもたらしている。』わたしたちの大モーツァルトは、これをご自身の耳で確かめなくてはならない、なぜなら、彼がここにくるのではないかという噂があるからである。」、とプラハ新聞は書いている[18]。実際、この上演後、「フィガロの結婚」が大成功を納めたので作曲者自身に是非指揮をしてほしい、との招待状がモーツァルトに届いた[19]。年が明け 1787 年 1 月 11 日に夫人のコンスタンツェと共にプラハに到着したモーツァルトは、19 日に新作のシンフォニー D-Dur KV 504 を初演した[20]。

この年の２度目の訪問中、10 月 29 日には帝室劇場で歌劇「ドン・ジョバンニ」"*Don Givanni*" KV 527 が作曲者自身の指揮により初演された。この上演は大成功に終わり、同地の新聞では、「識者と音楽家は、『プラハではこれに匹敵する上演はこれまでなかった』と述べている」、と報道されている[21]。また、この滞在中、モーツァルトはドゥシュコヴァー夫人のために「恋人

よ、さようなら」"*Bella mia fiamma, addio*" KV 528 を作曲している。この作品については、なかなか作曲の約束を実行しないモーツァルトに業を煮やしたドゥシュコヴァー夫人が、彼を別荘の客間に閉じ込め、鍵を掛けて作曲を無理矢理仕上げさせた。そして、そのお返しに今度はモーツァルトが、もし夫人がこのアリアを初見で正確に歌わなければ、曲を彼女に手渡さないと言った、という挿話も知られている[22]。この歌曲のテクストには、明白なこの二人の芸術家の間に存在した強い感情の表現が多く暗示されている[23]。

３度目のプラハ訪問は 1789 年５月末から６月初頭で、ベルリンへの旅行の帰途短期滞在した[24]。最晩年の 1791 年、神聖ローマ皇帝レオポルド２世のボヘミア王戴冠に際し注文を受け、歌劇「皇帝ティートの慈悲」"*La clemenza di Tito*" KV621 を短期間で作曲、ヴィーンからプラハ行きの馬車の中で作曲を続けたと言われている[25]。８月 28 日にプラハに到着、９月６日に皇帝臨席のもと王立劇場 Stavovské divadlo で初演された[26]。

このわずか３ヶ月後、12 月５日にモーツァルトはヴィーンで死去した。９日後の 12 月 14 日、プラハの聖ミクラーシュ教会でモーツァルトの追悼式が行われた。その際、モーツァルトの死を悼むプラハ市民たちが 4000 人も詰めかけたと言われ、その人気の高さが伺える[27]。この追悼式では、ボヘミア出身の作曲家アントニオ・ロセッティ Antonio Rosetti (ca. 1750-1792) のレクイエム *Requiem* Es-Dur RWV H15 が演奏された[28]。

ベートーヴェンとドゥシュコヴァー夫人

1792 年、ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) は、生まれ故郷のボンを後にしヴィーンに移り住んだ。ヴィーンでは、音楽の庇護者として著名なカール・アロイス・フォン・リヒノフスキー侯爵 Karl Lichnowsky (1761-1814) から高い評価を受けた。侯爵は最も有力な後援者となっただけではなく、公私にわたるよき理解者としてベートーヴェンを援助し、1795 年、彼を伴いプラハを訪れた。その際、ベートーヴェンはドゥシュコヴァー夫人の別荘ベルトラムカを訪問し、夫人が愛したモーツァルトの楽曲や彼自身の作品を披露した。ベートーヴェンは 16 歳年上のドゥシュコヴァー夫人に惹かれ、その後も何度もプラハを訪れることとなった[29]。

プラハでの短い滞在ののちヴィーンに戻ったベートーヴェンは、戻ってからふた月もしない 1796 年２月、再びプラハを訪れた。今回もリヒノフスキー侯爵も同行したが、約２週間後、侯爵がヴィーンに戻ったのちもベートーヴェンは引き続きプラハに滞在し、約２ヶ月滞在したのちにドレスデン、ライプツィヒ、ベルリン方面に旅立った。

この２回目の滞在中、ソプラノ歌手として著名なドゥシュコヴァー夫人のために、シェーナとアリア「おお、裏切り者め」 "*Ah! perfido*"op. 65 を作曲している。なお、この楽曲は後に出版され、ボヘミアの貴族であるジョゼフィーヌ・ド・クラリ・アルドリンゲン伯爵夫人 Josephine de Clary Aldringen (1777-1828) に献呈されている[30]。同伯爵夫人は、1797 年、クリスティアン・クリストフ・クラム＝ガラス伯爵 Christian Christoph von Clam-Gallas (1771-1838) と結婚した。伯爵夫人はこのシェーナとアリア以外に、数曲のマンドリンのための作品も献呈されている[31]。

なお、ベートーヴェンによるハルモニームジークである２本のクラリネット、２本のホルン、２本のファゴットのための六重奏曲 Es-Dur op. 71 はこの２度目のプラハ訪問の後作曲されている[32]。

３．管楽パルティアの伝承

現存するドゥシェクの管楽パルティアは 48 曲であり、うち 47 曲はスィーコラの目録に含まれている[33]。この 47 曲のうち３曲 C-Dur SýkD: 87、F-Dur SýkD: 88、B-Dur SýkD: 89 はクラム＝ガラス伯爵家のみに伝わり[34]、残りはパフタ伯爵家伝承の楽曲である。両伯爵家どちらにも伝承するパルティアは１曲 A-Dur SýkD: 68 のみである[35]。また、２曲 B-Dur SýkD: 56、および D-Dur SýkD: 69 は、チェコ北部のドイツ国境にほど近いオセク Osek の修道院で伝承されていた。スィーコラの目録に含まれていない１曲 F-Dur SýkD: 89 もクラム＝ガラス伯爵家の伝承である[36]。クラム＝ガラス伯爵家伝承のパルティアはチェコ北東部のフリードランド Frýdlant の伯爵家所有の城に保管されていた。これらの楽譜の伝承に関しては後述する。したがって、全 48 曲のパルティアは、現在、チェコ国立博物館附属音楽図書館に所蔵されている。

パフタ伯爵家

パフタ伯爵家は、1669 年以来ボヘミア北部のリブリツェ Liblice に領地を持ち、18 世紀、19 世紀を通じ、音楽を愛好した貴族として知られ、とりわけ管楽アンサンブルでよく知られていた[37]。特に、ヤン・ヨセフ・フィリプ・パフタ伯爵 Jan Josef Filip Pachta z Rájova (1723-1822) とその甥であるヤン・ヨセフ・パフタ Jan Joseph Pachta (1756-1834) はともに管楽アンサンブルを持ち、それらは 1796 年の「ヴィーンとプラハの音楽年報」"Jahrbuch der Tonkunst für Wien und Prag" の、「ボヘミアにおける音楽の状況について」 "Über den Zustand der Musik in Böhmen" の中で「多くの騎士達は卓越した楽師からなる楽団を有していたが、その多くは管楽器奏者からなっていた。現時点で唯一残っているのは、ヨーハン・パフタ伯爵のものである[38]」と述べられている。さらに、ゴットフリート・ヨーハン・ドラバチ Gottfried Johann Dlabacž (1758-1820) の「一般的歴史的

芸術家百科事典」"Allgemeines historisches Künstler-Lexikon" では次のように記載されている。

> 「パフタ、ヨハン、伯爵、よい音楽家であり作曲家。1780 年、彼は２本のホルン、２本のオーボエとファゴットのためのシンフォニーを作曲。この数少ない音楽愛好家は常に家臣やよその音楽家から構成されるハルモニームジークを有していた。ゲルバーの音楽家事典 95 ページを見よ。」[39]

パフタ伯爵のハルモニームジークは、1762 年に設立されたとされ、少なくとも 1815 年までは存在していたことが確認されている[40]。前述の通り、1787 年１月、モーツァルトは彼の「フィガロの結婚」 KV 492 の人気で沸き立つプラハを訪れている。その際、パフタ伯爵に食事に招かれ、伯爵の依頼によりフルート、ピッコロ、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、ティンパニ、ヴァイオリン、バスのための「６つのドイツ舞曲」KV 509 を作曲している[41]。

パフタ伯爵家の管楽作品の手稿譜は、リブリツェのヤン・ヨセフ・フィリプ・パフタ伯爵から、1822 年、彼の甥であるカール・パフタ Carl Pachta / Karl Graf Freiherr von Rayhofen (1787-1859 **以前**)[42] が相続し、その後、1841 年、フルードリヒ・デイム伯爵 Friedrich-Joseph Deym von Střítež (1801-1853) が購入、おそらくこのコレクションは 1862 年以前に彼らの音楽教師でもあり、プラハの歌手、音楽評論家、フランティシェク・ピヴォダ František Pivoda (1824-1898) に売却、1870 年、ピヴォダは、プラハ芸術協会 Umělecká beseda[43] に譲った[44]。芸術協会は音楽や文学などの部門を有し、19 世紀後半から 20 世紀にかけ、また現在でも、音楽、芸術活動の中心として教育、演奏会企画など積極的な活動を行っている[45]。1942 年に、パフタ伯爵家由来の楽譜コレクションを含め同芸術協会所有の楽譜はチェコ国立博物館附属音楽図書館に集められた[46]。さらに、1949 年、チェコスロヴァキア社会主義共和国成立後、チェコ国内の多くの楽譜資料がチェコ国立博物館附属音楽図書館に集められた[47]。同図書館所蔵のパフタ伯爵家伝承の管楽パルティータには、ドゥシェクおよびマシェクの作品を含め約 260 曲が含まれている[48]。

クラム＝ガラス伯爵家

クラム＝ガラス伯爵家のハルモニームジークもパフタ伯爵のものと同様、18 世紀後半よく知られていた。クラム＝ガラス伯爵家はボヘミア北部、現在のポーランド、ドイツの国境近くのフリードラント Frýdlant v Čechách に領地を持ち、居城を構えていた。ドイツのツィッタウ Zittau やチェコのリベレツ Liberec に近い。1620 年の「ヴィラーホラ（白山）の戦い」後、アルブレヒト・ヴェンツェル・オイゼービウス・フォン・ヴァレンシュタイン Albrecht Václav Eusebius z Valdštejna-Wallenstein (1583-1634) の領地であったが、30 年戦争の舞台となり、後にガラス伯爵家、ついでクラム＝ガラス伯爵家の所有となった。七年戦争 (1756-1763)、ナポレオン戦争 (1813) などのため街は幾度も荒廃した。数世紀間フリードラントは周囲のリベレツなどの街よりも重要な役割を果たしたが、19 世紀に入ると繊維工業のためリベレツが急速に発展し、フリードラントは次第に衰退した。

フリードラントの管楽アンサンブルは、クラム＝ガラス伯爵家に属し、フランツ・アスペルマイヤー Franz Aspelmayr (1728-1786)、ジュゼッペ・ボンノ Giuseppe Bonno (1711-1788)、カール・ディッタース・フォン・ディッタースドルフ Carl Ditters von Dittersdorf (1739-1799)、イシー・ドゥルジェツキー Jiří Družecký (1745-1819)、ゲオルグ・フリードリヒ・フクス Georg Friedrich Fuchs (1752-1821)、ヨーゼフ・フィアラ Josef Fiala (1748-1816)、クリストフ・ヴィリバルト・グルック Christoph Willibald Gluck (1714-1787)、ヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn (1732-1807)、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、アントニオ・サリエリ Antonio Salieri (1750-1825)、フランツ・クサヴァー・ジュースマイヤー Franz Xaver Süßmayr (1766-1803)、アントニーン・ラウベ Antonín Laube (1718- 1784)、ヴィンツェンツォ・リギーニ Vincenzo Righini (1756-1812)、ヤン・クシュチテル・ヴァニュハル Jan Křtitel Vaňhal (1739-1813)、ヤン・ネポムク・ヴェント Jan Nepomuk Vent (1745-1801) のパルティア、舞曲や行進曲、歌劇、ジングシュピールの編曲作品など数多くの作曲家の管楽作品が残されているが、これらは、現在、チェコ国立博物館付属音楽図書館に所蔵されている[49]。

オセク修道院

オセク修道院は、北ボヘミアの重要なシトー派修道院の一つで現在のドイツ国境に近く、エルツ山脈のチェコ側に位置する。その歴史は古く、1192 年まで遡ることができる[50]。

音楽は非常に重要な役割を果たしており、特に修道士たちの楽しみや儀礼の際には演奏が行われ、管楽作品鍵盤楽器作品が伝承されていた[51]。特に、司祭、オルガン奏者、作曲家、音楽教師であったヤクブ・ヤン・トラウトツル Jakub Jan Trautzl (1749-1834) は、非常に能力も高く、弦楽器や管楽器のための作品も数多く残され、３本のホルンのためのソナタ、２本のクラリネットと２本のファゴットのためのアレグロ、３本のファゴットと２本のコントラバスのための作品の他、２本のクラリネット、２本のホルンと１本のファゴットのためのハルモニームジークも残されている[52]。また、ヨアヒム・アントニーン・クロン Joachim Antonín Cron

(1751-1826) もトラウトツルやベネディクト・ベルンハルト・ヴェヌーシ (1751-1823) Benedikt Bernhard Venusi[53]、ニヴァルド・ゾマー Nivard Sommer (1713/14-1758)[54] と並ぶオセク修道院の作曲家として知られている。

同修道院には、２曲のドゥシェク作曲のパルティアが伝承されていたが、現在はチェコ国立博物館附属音楽図書館に所蔵されている[55]。オセク修道院での活発な管楽作品を含む音楽活動を考えると、このドゥシェクの作品も一連の作品同様修道士らにより演奏されたと推測できる。しかし、他所で伝承された楽曲がオセク修道院で所蔵されていた可能性も否定できない。同修道院における伝承の詳細は確認できなかった。

４．ドゥシェクの管楽パルティア

この章ではドゥシェクのパルティアを包括的に取り上げる。なおこの項で使用する作品番号 "SýkD" は、チェコの音楽学者、ヴァーツラフ・ヤン・スィーコラ Václav Jan Sýkora (1918-1974) による唯一のドゥシェクの作品目録に依拠する[56]。

最初に、全パルティアの中で唯一出版されている Parthia F-Dur SýkD: 49 を取り上げ、彼の作品の特徴の一例を提示する。その後、全パルティアの様式、形式、伝承などを扱い全体的な特徴を明らかにする[57]。

４．１　Parthia F-Dur SýkD: 49

ドゥシェクのパルティアの中で唯一の出版譜が存在するのは、Parthia F-Dur SýkD: 49 で、ボヘミアの作曲家による楽譜全集 Musica antiqua bohemica に所載されている[58]。編成は、２本のオーボエ、２本のホルンと１本のファゴットで４楽章編成の楽曲である。最初に、このパルティアを分析し、ドゥシェクのパルティアの特徴を概観する。

1762 年の作曲年が記載されているこのパルティアは、パフタ伯爵家に伝承した作品の一つである。楽器の書法は、全体的に２本のオーボエが旋律を担当、頻繁に３度で重ねられている。ファゴットは時折旋律的な動きはあるものの、常に低声部を担い旋律楽器としての扱いは限定的である。ホルンは、常に和声の充填、あるいはリズムの補強に当てられ、稀に見せる旋律部分も３度の重なりやホルン５度に限られている。また、曲は極めて単純で対位法的部分はほとんどない。

第１楽章 *Allegro* は 55 小節からなる小規模なソナタ形式である。早くも８小節目で属調である C-Dur に転調、11 小節目から第２主題となる。反復記号の後第 20 小節から展開部が始まるが展開も限定的なまま、わずか８小節で終結、再現部第１主題の後の推移部分で下属調 B-Dur から C-Dur と若干変化をもたらすが、第２主題の後小結尾を経て曲を閉じる。

第２楽章 *Menuetto* は、反復記号を持った 24 小節の二部形式（10＋14 小節）の楽章である。前半は属調の C-Dur で終始、後半部冒頭ですぐに主調に戻る。この楽章は、*p*（ピアノ）と *f*（フォルテ）が交互に、多くは２小節ごと、終結部近くでは１小節ごと頻繁に現れるのが特徴である。

第３楽章 *Adagio* は２部形式の 16 分音符と 16 分音符の三連符を特徴とし、全体が 23 小節（11＋12 小節）の短い緩徐楽章である。この楽章も第２楽章と同様、強弱の変化が頻繁に現れる。

終楽章 *Presto* は快速な反復記号を含む二分形式で、わずか 20 小節（８＋12 小節）の小曲である。前半の反復記号前は半終止、後半は *p* から *cresc.* し、強奏で曲を閉じる。

このパルティアはこれまで述べた通り、同時代に作曲されたと伝えられるヨーゼフ・ハイドンのディヴェルティメントの書法に近く、ハルモニームジーク成立初期の特徴を有している。

４．２　ドゥシェクのパルティアの特徴

編成

現存するドゥシェクのパルティアは 48 曲で、うち 36 曲はそれぞれ２本ずつのオーボエ、ホルン、ファゴットの６重奏、６曲は２本ずつのオーボエ、ホルンおよび１本のファゴット、５曲が２本のオーボエと１本のファゴットの編成である。

唯一パルティア F-Dur Parthia B-Dur SýkD: 72 は楽器編成が他と異なり、パート譜にはクラリネットと記載されている。1762 年の書き込みがある楽譜の表紙には、"*2 oboe*" の記述があるにもかかわらず、パート譜には "*clarinet I. mo*"、"*Clarino II. nd*" (sic!) との記載がある。また、ファゴットパートは２種あり、２つめのパート譜は *Es-Dur* に移調されている。このパルティア以外にクラリネットが用いられている楽曲がないこと、ファゴットのパートが移調されていることから、本来オーボエが編成されていた F-Dur パルティアを、後に B 管のクラリネットで演奏する際に　オーボエパートをそのまま移調読みすることにより Es-Dur としファゴットのパートを書き換えた可能性が高いと推測できる[59]。

伝承

伝承は３カ所で、パフタ伯爵家が 44 曲、クラム＝ガラス伯爵家（フリードラント）が５曲、およびオセク修道院が２曲である。クラム＝ガラス伯爵家伝承の１曲、すなわち Parthia A-Dur SýkD: 68 はパフタ家のものと同一、オセク修道院の２曲 Parthia B-Dur SýkD: 56、Parthia D-Dur SýkD: 69 もパフタ家に伝承している。ク

ラム＝ガラス伯爵家のみに伝承しているのは、Parthia C-Dur SýkD: 87、Parthia F-Dur SýkD: 88、Parthia B-Dur SýkD: 89、およびスィーコラ番号に含まれていない Parthia F-Dur SýkD: deest の４曲である。パフタ家伝承のパルティアのうち 13 曲は作曲年が 1762 年から 1764 年と表紙に記載されている。作曲年の記載がない楽曲も、その楽譜の保存状態、書法などからおそらくは同年代に書かれたと類推できる。

楽章編成・メヌエット楽章の位置

パルティアのほとんどはメヌエットを含む４楽章編成で 44 曲、３楽章編成は４曲である。３楽章編成の楽曲のうち、メヌエット楽章が中間楽章のもの２曲、メヌエット楽章を含まないものが１曲、メヌエットが終楽章に置かれたものが１曲である。４楽章編成のパルティアはすべてメヌエット楽章を含むが、第２楽章の場合が 28 曲、第３楽章の場合が 16 曲である。

４楽章編成のパルティアのうち、Parthia D-Dur SýkD: 59 と Parthia F-Dur SýkD: 61 の２曲は、緩徐楽章として第３楽章に *Polonese* と表記している。

各楽章の規模

すべての楽章の規模は小さく、冒頭楽章は少ないもので 18 小節、多くは 20 ないし 50 小節で、最も小節数が多い楽章でも 74 小節である。メヌエット楽章に関しては後述するが、16 から 24 小節のメヌエットとトリオあるいはメヌエットのみからなる。緩徐楽章も多くは 20 ないし 40 小節、終楽章は最も小節数が少ないのは８分の６拍子でわずか 12 小節である。また、１小節１拍の８分の３拍子で 27 小節など、終楽章は特に短いのもドゥシェクのパルティアの特徴と言える。

ほぼ同時代である 1760 年初期に作曲されたハイドンのディヴェルティメント３曲 C-Dur Hob. II: Nr. 7、C-Dur Hob. II: Nr. 14、F-Dur Hob. II: Nr. 15 の規模とほとんど変わらない。第１楽章は 23 ないし 51 小節、メヌエット楽章も、トリオ部分を含め 20 から 36 小節、終楽章も 24 から 36 小節である[60]。これらのディヴェルティメントはチェコの貴族モルツィン伯爵のハルモニームジークのために作曲されたと言われているが、ドゥシェクのパルティアのモデルになった可能性も否定できない。なお、Hob. II: Nr. 14t と F-Dur Hob. II: Nr. 15 は楽器編成もドゥシェクのパルティアと同一である[61]。

主調の選択

特筆すべきは調の選択であり、20 曲が F-Dur で突出している。D-Dur が７曲、 B-Dur が６曲、C-Dur、G-Dur および A-Dur がそれぞれ５曲である。当時のオーボエにとり F-Dur と C-Dur は演奏しやすく[62]、これは理由の一つであると類推できる。特徴的なのは、ハルモニームジーク全体では極めて多くの例が見られる Es-Dur が用いられていないこと、逆に、ほとんど例のない A-Dur のパルティアも５曲残されていることである。

各楽章の調選択

35 曲のパルティアはすべての楽章が主調である[63]。13 曲は、第２楽章あるいは第３楽章の緩徐楽章が下属調（６曲[64]）、属調（２曲[65]）、平行短調（３曲[66]）、同主短調（２曲[67]）である。短調の緩徐楽章が５曲のみであるのも特徴の一つである。また、Es-Dur の選択が１曲に限られているのも注目すべき点で[68]、やはりこの調を避けていることが読み取れる。

各楽章の速度表示[69]

第１楽章はすべての楽曲で快速楽章であり、*Allegro*、*Allegro spirito*、*Allegro assai*、*Allegro vivace*、*Allegro moderato*、*Vivace* などが与えられている。Parthia F-Dur SýkD: 44 は "*Marche*" （行進曲）の表記がある。

緩徐楽章は、*Adagio*、*Andante*、*Adagio cantabile*、*Largo*、*Larghetto*、*Andante grazioso* などで、Parthia F-Dur SýkD: 61 の第３楽章は *Polonese adagio* と記入されている。

終楽章は、単に *Finale* と記載したものもあるが、*Allegro*、*Allegro assai*、*Finale Allegro*、Presto、*Finale Presto* と記入されている。Parthia F-Dur SýkD: deest は、*Scherzo* と書かれているが、８分の６拍子で実質的には快速楽章のフィナーレと変わらない[70]。前述の３楽章編成のパルティア Parthia F-Dur SýkD: 76 は終楽章がメヌエットである。

各楽章の拍子[71]

第１楽章は４分の２拍子が９曲、４分の３拍子が 12 曲、２分の２拍子が 10 曲、４分の４拍子が 16 曲で、この時代の他の楽曲の傾向と比較しても大きな傾向は認められない。

緩徐楽章は４分の２拍子が圧倒的に多く 30 曲である。４分の３拍子が 12 曲、８分の６拍子、８分の３拍子がそれぞれ１曲ずつである。

最終楽章は、４分の２拍子が 28 曲、８分の３拍子が 14 曲、８分の６拍子が４曲、そして、１曲はメヌエットである。特徴的なのは、１小節を１拍で扱う８分の３拍子を選択することが多いことである。

メヌエット楽章のトリオ

３楽章編成、４楽章編成を含めすべてのパルティアのうち、メヌエット楽章を含む楽曲が 47 曲あり、うち今回未確認の５曲以外の 42 曲を対象に、メヌエット楽章を精査した。この 42 曲のうちトリオを持つものは 33 曲であり、全体の４分の３を占める。また、小節数はメヌエットの基本的な形を踏襲しており、多くは 16 小

節、24 小節、といった８小節単位の楽節をもとにし、以下のような構造を持つ。

Menuetto				Trio			
A	:‖:	B	:‖:	C	:‖:	D	:‖
Fine							*D. C.*

トリオの調選択は次の５種である。

１．主調 (T)　２．属調 (D)　３．下属調 (S)
４．平行調 (P)　５．同主調 (V)

この中で、下属調を選択したトリオは 15 曲で、全体の 56 パーセントを占める。ついで 7 曲が平行調（26％）、4 曲が属調（15％）、同主調が 1 曲である。また、それぞれのトリオの前半部分 C の最後の和音選択は次の通りである。主調あるいは属調を選択した場合にはトリオの前半部分の繰り返しの前では半終止する。短調を選択した場合の、当該箇所 Trio C は次の３種に分類できる。

1.　*t – tP* :‖: *tP – t* :‖
2.　*t – D* :‖: *D – t* :‖
3.　*t – t* :‖: *tP – t* :‖
3'.　*t – t* :‖: *tP – tP*:‖

t: 主調（短調：トニカ）
D: 属和音（半終止）
tP: 平行調（長調）

上記３つの類型の具体例をあげる。第１類型は Parthia D-Dur SýkD: 62 で、トリオは d-Moll から始まりトリオ前半部分で F-Dur に転調する、リピート記号の後は F-Dur で始まり、 d-Moll に転調し、*D. C.* によりメヌエットに戻る。第２類型は Parthia C-Dur SýkD: 63 で、この場合は a-Moll から始まり属和音、すなわち E 音上の長三和音で半終止する、リピート記号の後は、同じ和音から始まりトリオの主調である a-Moll に回帰する。第３類型は Parthia D-Dur SýkD: 65 で、h-Moll で始まり前半はこの調のトニカで終止、後半は冒頭から D-Dur で始まり h-Moll に転調しトリオを終える。第３類型の変化型で、この場合には後半は平行長調のまま終わる。メヌエット・トリオ楽章に関しては、ドゥシェクのパルティアは極めて多彩な和声的要素を有している。

フェルマータによる休止

フェルマータにより休符が引き伸ばされ、旋律が休止するのもドゥシェクのパルティアの特徴である。例えば、Parthia F-Dur SýkD: 55 の第３楽章 Adagio では、休符上にフェルマータが記載され、３回にわたり全休止し印象的に旋律が途切れる。

シンコペーションによる律動感

Parthia D-Dur SýkD: 65 の第１楽章 Allegro assai、Parthia C-Dur SýkD: 63 の第２楽章 Largo、Parthia F-Dur SýkD: 53 の終楽章などは冒頭からシンコペーションを用いた律動感溢れる旋律となっている。

ファゴットパートの旋律的使用

多くの場合、ファゴットはバス楽器として楽曲の和声を支え、２本のファゴットを用いているパルティアでは多くはユニゾンで低音を補強している。

２本のファゴットを用いているパルティアでは積極的に旋律を担当させていることもある。Parthia D-Dur SýkD: 65 の第３楽章 Adagio では 16 分音符の分散和音と 32 分音符の上行形音階によりファゴットに印象的な旋律を与えている。

Majore と *Minore*

古典派コンチェルトのロンド形式の終楽章の中間部にしばしば現れる *Minore*（短調）の表示を持つ楽章がいくつかあるのが特徴的である。Parthia C-Dur SýkD: 63 の終楽章はロンド形式に近く、その中間部分で *Minore* の表記があり、同主短調である c-Moll に転調している。中間部分の後半は平行調の Es-Dur で始まり、再び c-Moll に転調する。この部分の結尾には、*Da capo Majore* と記され、冒頭に回帰する。これは、ロセッティなどのコンチェルトの終楽章と同形式で、コンチェルタントであると同時に形式的にもロンドの様相を呈している

おわりに

ドゥシェクの管楽パルティアは、ハルモニームジーク成立最初期の特徴を有しており、ハイドンの同時期の作品に類似している。オーボエ、ホルン、ファゴットという楽器編成、小規模な３あるいは４楽章編成といった外的な特徴の他、書法は主として２本のオーボエが旋律を担当し、ファゴットが低音を支え、ホルンがリズムと和声を充填する形である、という点でも共通している。この傾向は、約 20 年後に作曲されたモーツァルトやロセッティのハルモニームジークと比較すると際立っており、楽章構成はシンフォニーと共通する曲も多いが、内容的にはディヴェルティメントの要素をもつ作品群であると言える。また、どのパートもヴィルトゥオーゾ的要素は無く、音域も限定的である。ドゥシェクの弟子でもあるマシェクの作品が、盛期古典派から初期ロマン派の特徴を持つ楽曲であるの

に対し、一世代前の世代に属するドゥシェクの管楽パルティアは、管楽器の扱いも極めて限定的で規模も小さくいわゆる BGM 的要素が強い作品である。ドゥシェクの作品は管楽器のための作品はもとより、シンフォニー、コンチェルト、室内楽作品などもこれまでほとんど研究されておらず、実際の演奏も極めて限定的なものであった。

本稿では、ドゥシェクの生涯と彼を取り巻く音楽家たちとの関係、および 48 曲の管楽パルティアの伝承と概略を調査した結果を中心に述べたが、実際に演奏できる形に楽譜を整理し、各曲の特徴を明らかにし、ドゥシェクのパルティアの全貌を明らかにしたいと考えている。

2017 年、プラハのチェコ国立博物館附属音楽図書館所蔵の楽譜をもとに主としてヴィンツェンツ・マシェクの管楽パルティア、および鍵盤楽器を独奏楽器とする管楽パルティアを研究したが、その際付随資料として入手したドゥシェクの管楽パルティアを研究した。プラハ滞在中、様々な資料提供、調査協力をしていただいた同音楽図書館と司書であるマリー・シュタストナー女史に深く感謝したい。

参考文献

Dlabacž, Gottfried Johann, "*Allgemeines historisches Künstler-Lexikon für Böhmen und zum Theil auch für Mähren und Schlesien*", Prag 1815
Freemanová, Michaela, "*Wind band (Harmonie) music in the Bohemian and Moravian music collections", in: Zur Geschichte der Aufführungspraxis der Harmoniemusik*", Michaelsteiner Konferenzberichte, Band 71, Michaelstein 2006
Ichikawa, Katsuaki, "*Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein*", Diss., Halle 2015
Kabelková, Markéta, "*Hudební archiv a kapela hraběte Jana Josefa Filipa Pachty*", in: "*Hudební věda*"（音楽学）, Praha 1991, pp. 329-333
Sýkora, Václav Jan, "*František Xaver Dušek. Život a dílo*", Prag 1958
Volek, Tomislav, "*Mozart in Prag*", Praha 1991
Wurzbach, Constant, "*Biographisches Lexikon des Kaiserthums Oesterreich*", Band 3, Wien 1858

---

[1] ハルモニームジークとは、基本的に２本ずつの木管楽器（ホルンを含む）による管楽アンサンブル、あるいは、その楽曲を意味する。
[2] 編成に関しては、モーツァルトのセレナーデのように２本ずつのオーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットのものから、トランペットやトロンボーンを含むもの、また、シュヴァルツェンベルク家所蔵の６本のファゴットのためのハルモニームジークなど極めて多彩である。
[3] Roger Hellyer, 守山光三訳, 「ハルモニームジーク」, ニューグローヴ世界音楽大事典第 13 巻, 講談社 1992, p. 527-528
[4] ドイツ語でドゥシェクと発音する場合には、Duschek となる。
[5] チェコ語での š は「シュ」の発音であり、J. L. ドゥシークの場合には、Dusík あるいは Dussek で、ドゥシーク、またはドゥセクの標記・発音が適当であると思われる。
[6] ドイツ語版 Wikipedia では、"*– nicht zu verwechseln mit dem Bekannten von Johann (sic!) Wolfgang Mozart dem Pianisten Franz Xaver Duschek (1736 (sic!) –1799) (tschechisch: František Xaver Dušek) aus Mozarts Zeit im Landhaus Betramka bei Prag –*"（モーツァルトの時代にプラハの別荘ベルトラムカに住んでいたピアニストであり、ヴォルフガング・モーツァルトの知人であったフランツ・クサヴェル・ドゥシェクと混同してはならない」と特記されている。https://de.wikipedia.org/wiki/Jan_Ladislav_Dus%C3%ADk, 2018. 6. 12
[7] 父ヤン・ドゥシーク Jan Dusík (1738-1818)、弟フランティシェク・ヨセフ・ドゥシーク František Josef Dusík はいずれも作曲家、娘カテジナ・ヴェロニカ・アンナ・ドゥシコヴァー Kateřina Veronika Anna Dusiková (1769-1833) は歌手、ピアニスト、ハープ奏者、妻ソフィア・ドゥシーク Sophia Dusík (1775-1847) はイタリア系イギリス人で歌手。
[8] ニューグローブ音楽大事典では、「しばしばフランティシェク・クサヴェル・ドゥシェクと混同される」、チェコ語版 Wikipedie でも、"*Někdy je mylně ztotožňován s Františkem Xaverem Duškem (1731–1799), rovněž hudebním skladatelem, ale o půl století starším.*"（時折、同じように作曲家であるフランティシェク・クサヴェル・ドゥシェクと誤って同一人物であるとされるが、半世紀も年齢が上である。）, https://cs.wikipedia.org/wiki/František_Dušek, 2018. 6. 10
[9] Gottfried Johann Dlabacž (Bohumír Jan Dlabač), "*Allgemeines historisches Künstler-Lexikon für Böhmen und zum Theil auch für Mähren und Schlesien*", Prag 1815, col. 342-343
[10] 1777 年、ヨセファ・ドゥシュコヴァーの母の出身地、ザルツブルクでモーツァルトと会う。Gabriela Kalinivá, Adam Hnojil a. kol., "*Malostranský hřbitov hisorie a současnost*"（マロストランスカー墓地 歴史と現在）, Praha 2016, p. 258
[11] Kalinivá, p. 258, Dlabacž, col. 342
[12] Dlabacž, col. 342
[13] Dlabacž, col. 342
[14] Kalinivá, p. 258
[15] Kalinivá, p. 51
[16] Václav Jan Sýkora, "*František Xaver Dušek. Život a dílo*", Prag 1958, pp. 214-234
[17] 海老澤敏, 「モーツァルト事典」, 東京書籍 1991, pp. 163-165
[18] Tomislav Volek, "*Mozart in Prag*", Praha 1991, pp. 4-5
[19] モーツァルト事典, p. 295
[20] このシンフォニーは「プラハ」というタイトルで知られる。
[21] Volek, p. 6
[22] モーツァルト事典, p. 178, 海老沢敏（翻訳）他, モーツァルト書簡 VI ウィーン時代後期, 白水社 2005, p. 430
[23] Volek, p. 6
[24] H. C. ロビンス・ランドン, 海老沢敏（監修）, 「モーツァルト大事典」, 平凡社 1996, p. 370
[25] モーツァルト大事典, p. 372
[26] モーツァルト大事典, p. 141
[27] Katsuaki Ichikawa, "*Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein*", Diss., Halle 2015, pp. 66-67
[28] Oskar Kaul, *Denkmäler der Tonkünst in Bayern*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1912, p. XXVII
[29] 石井清司, 「ドラマティック・ベートーヴェン 〜自己プロデュースの達人〜」, ヤマハミュージックメディア 2009, p. 144
[30] Tia DeNora, "*Beethoven and the Construction of Genius: Musical Politics in Vienna, 1792-1803*", London 1995, p. 74
[31] Sonatine für die Mandoline und Cembalo c-Moll WoO 43a, C-Dur WoO 44a, Adagio für die Mandoline und Cembalo Es-Dur WoO 43b, Andante und Variationen D-Dur WoO 44b が現存している。

[32] これ以外に、この六重奏曲の編成に２本のオーボエを加えた八重奏曲 Es-Dur op. 103 があるが、これは 1792-93 年、ボンで作曲されている。
[33] Sýkora, pp. 214-234, SýkD: スィーコラによるドゥシェクの作品目録。
[34] Sýkora, pp. 233-234, CZ-Pnm: XLII E 149, XLII E 135, XLII E 134 (CZ-Pnm: チェコ国立博物館附属音楽図書館)
[35] Sýkora, p. 225
[36] CZ-Pnm: XLII E 15
[37] Michaela Freemanová, "*Wind band (Harmonie) music in the Bohemian and Moravian music collections", in: Zur Geschichte der Aufführungspraxis der Harmoniemusik*", Michaelsteiner Konferenzberichte, Band 71, Michaelstein 2006, p. 355
[38] "*Nachricht: Ueber den Zustand der Musik in Böhmen*", in: "*Allgemeine musikalische Zeitung*" 1800. 4. 9, Leipzig 1800, col. 493
[39] Gottfried Johann Dlabacž, "*Allgemeines historisches Künstler-Lexikon für Böhmen und zum Theil auch für Mähren und Schlesien*", Bd. 2, Prag 1815, col. 419
[40] ドラバチの記述による。Dlabacž, col. 419
[41] Markéta Kabelková,, "*Hudební archiv a kapela hraběte Jana Josefa Filipa Pachty*", in: "Hudební věda", Praha 1991, p. 330
[42] Freemanová, p. 356
[43] 1862 年設立、マラー・ストラナに本部がある。
[44] Freemanová, p. 356
[45] Petr Macek, "*Český hudební slovník osob a instituci*", Praha 1965, p. 812
[46] Freemanová, p. 356
[47] その後、1972 年、社会主義政権のもとでプラハ芸術協会は解散するが、1990 年、ビロード革命後再結成され、現在でも活発な芸術活動を行なっている。
[48] プラハ国立博物館附属音楽図書館のパフタ伯爵家伝承の楽譜カタログ CZ-Pnm: XXII による。市川克明, 「18 世紀後半から 19 世紀初頭のプラハの音楽活動について – パフタ伯爵家の管楽アンサンブル –」, 愛媛大学教育学部紀要 第 64 巻, 2017, p. 318
[49] Freemanová, p. 358-359
[50] Jan Zástěra, "*Hudba oseckých cisterciáků na přelomu 18. a 19. století*"（18 から 19 世紀にかけてのシトー派修道士の音楽）, Univerzita Karlova v Praze, Pedagogická fakulta Katedra hudební výchovy（プラハ・カレル大学教育学部修士論文）, Praha 2008, p. 10
[51] Zástěra, p. 65
[52] Zástěra, p. 65
[53] Zástěra, p. 71
[54] Zástěra, p. 18
[55] B-Dur SýkD: 56、D-Dur SýkD: 69
[56] Sýkora, "*František Xaver Dušek. Život a dílo*", Prag 1958
[57] 巻末の作品一覧を参照のこと。
[58] Vratislav Bělský, "Musica Antiqua Bohemica, Series I, Vol.35 "Serenade boheme Partite e Nottruni", Praha 1958, pp. 11-15
[59] 今回の研究でこのパルティアのオリジナル筆者譜は閲覧できなかった。今後の研究の課題とする。特に、ホルンパートの調の表示、２種めのファゴットのパート譜の筆跡を確認することでこの推測が証明できるものと思われる。
[60] Anthony van Hoboken, "*Joseph Haydn Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*" Bd. I, Mainz 1957, pp. 302-303, pp. 306-308
[61] ２本のオーボエ、２本のホルン、２本のファゴット。
[62] 例えば、モーツァルトのオーボエ協奏曲は C-Dur KV314、オーボエ四重奏曲は F-Dur KV 370 (K_6 368b)、アントニオ・ロセッティのオーボエ協奏曲は C-Dur ４曲 RWV C29-31, C32L（未完）、D-Dur １曲 RWV C33 、F-Dur ２曲 RWV C34, C35Q（疑作）、G-Dur ２曲 RWV C36, C37、ハイドンのオーボエ協奏曲 Hob: VII g C1（偽作）は C-Dur、フランティシェク・ヴィンツェンツ・クラマーシュ František Vincenc Kramář (1759-1831) のオーボエ協奏曲は２曲 op. 37, op.52 とも F-Dur、ヨハン・クリスティアン・バッハ Johann Christian Bach (1735-1782) のオーボエ協奏曲 W C 80, W C 81 も２曲とも F-Dur である。
[63] 例えばハイドンの 1760 年前後のシンフォニーでは、緩徐楽章に下属調、属調、同主短調が選択されている。
[64] Parthia G-Dur SýkD: 45 (C-Dur), C-Dur SýkD: 46 (F-Dur), D-Dur SýkD: 73 (G-Dur), F-Dur SýkD: 79 (B-Dur), B-Dur Sýk: 80 (Es-Dur), C-Dur SýkD: 83
[65] Parthia B-Dur SýkD: 74 (F-Dur), B-Dur SýkD: 85 (F-Dur)
[66] Parthia B-Dur SýkD: 75 (g-Moll), F-Dur SýkD: 76 (d-Moll), F-Dur SýkD: 81 (d-Moll)
[67] Parthia A-Dur SýkD: 82 (a-Moll), A-Dur SýkD: 86 (a-Moll)
[68] Parthia B-Dur Sýk: 80 (Es-Dur)
[69] メヌエット楽章の速度は特に表示されないことが多い。すでに、この舞曲の速度はあらかじめ決まっている。
[70] のちの時代、例えば、ベートーヴェンのシンフォニー、ピアノソナタでは４分の３拍子のスケルツォが一般的である。
[71] 緩徐楽章を持たない２曲のパルティアを除く 46 曲を考察の対象とし、メヌエット楽章は４分の３拍子であるため対象外とする。

表：F. X. ドゥシェクのパルティア

	SýkD	調	楽章数	編成	作曲年	第１楽章	第２楽章	第３楽章	第４楽章	CZ-Pnm
1	43	G	3	2Ob., 1Fg.	–	Allegro, 2/4, G, 33 T.	Menuet, 3/4, G, 24 Trio, 3/4, C, 18 T.	Finale, Allegro, 2/4, G, 44 T.	–	XXII - C68
2	44	F	4	2Ob., 1Fg.	1763	Marche Un poco allegro, 4/4, F, 25 T.	Allegro, 2/4, F, 20 T.	Menuet, 3/4, F, 18 T. Trio, 3/4, B, 16 T.	Allegro, 6/8, F, 12 T.	C69
3	45	G	4	2Ob., 1Fg.	1763	Allegro, 2/4, G, 18 T.	Menuet, 3/4, G, 16 T.	Adagio, 2/4, C, 16 T.	Presto, 3/8, G, 27 T.	C70
4	46	C	4	2Ob., 1Fg.	1763	Allegro, 2/4, C, 26 T.	Adagio 2/4, F, 20 T.	Menuet, 3/4, C, 16T. Trio, 3/4, G, 16 T.	Presto, 2/4, C, 20 T.	C71
5	47	C	4	2Ob., 1Fg.	1763	Allegro, 2/4, C, 16 T.	Menuet, 3/4, C, 16 T.	Adagio, 2/4, C, 16 T.	Finale, 3/8, C, 19 T.	C72
6	48	F	4	2Ob., 2Hn., 1Fg.	–	Allegro, 2/4, F, 27 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, B, 16 T.	Adagio, 2/4, F, 20 T.	Finale, 3/8, F, 24 T.	C135
7	49	F	4	2Ob., 2Hn., 1Fg.	1762	Allegro, 2/2, F, 54 T.	Menuet, 3/4, F 24 T.	Adagio, 2/4, F, 23 T.	Finale, 2/4, F 20 T.	C143
8	50	A	4	2Ob., 2Hn., 1Fg.	–	Allegro, 3/4, A, 43 T.	Menuet, 3/4, A, 16 T. Trio, 3/4, D, 16 T.	Adagio, 2/4, A, 17 T.	Finale, 2/4, A, 34 T.	C144
9	51	F	4	2Ob., 2Hn., 1Fg.	–	Allegro, 3/4, F, 70 T.	Menuet, 3/4, F, 24 T. Trio, 3/4, B, 20 T.	Andante 2/4, F, 17 T.	Finale, 2/4, F, 34 T.	C145
10	52	G	3	2Ob., 2Hn., 1Fg.	–	Allegro, 4/4, G, 37 T.	Menuet, 3/4, G, 18T. Trio, 3/4, C, 20 T.	Finale, 6/8, G, 21 T.	–	C146
11	53	F	3	2Ob., 2Hn., 1Fg.	–	Allegro, 2/2, F, 27 T.	Andante, 2/4, F, 16 T.	Finale, 2/4, F, 38 T.	–	C131
12	54	G	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, G, 46 T.	Menuet, 3/4, G, 20 T.	Adagio, 6/8, G, 28 T.	Allegro, 2/4, G, 33 T.	C134
13	55	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 3/4, F, 58 T.	Menuet, 3/4, F, 24 T. Trio, 3/4, F, 16 T.	Adagio, 2/4, F, 40 T.	Finale, 2/4, F, 33 T.	C136
14	56	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1762	Allegro, 3/4, B, 62 T.	Menuet, 3/4, B, 16 T. Trio, 3/4, B, 16 T.	Adagio, 2/4, B, 22 T.	Finale, 2/4, B, 40 T.	C137 Osek 610
15	57	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1762	Allegro spirito, 2/2, F, 25 T.	Menuet, 3/4, F, 20 T. Trio, 3/4, B, 22 T.	Adagio 2/4, F, 28 T.	Finale, 3/8, F, 27 T.	C138
16	58	G	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 2/4, G, 59 T.	Menuet, 3/4, G, 16 T. Trio, 3/4, C, 16 T.	Adagio 2/4, G, 37 T.	Allegro, 2/4, G, 20 T.	C139
17	59	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 2/2, D, 55 T.	Menuet, 3/4, D, 16 T. Trio, 3/4, G, 16 T.	Polonese 3/4, D, 37 T.	Finale, 2/4, D, 22 T.	C140

	SýkD	調	楽章数	編成	作曲年	第１楽章	第２楽章	第３楽章	第４楽章	CZ-Pnm
18	60	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1764/62	Allegro, 2/4, F, 28 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, F, 16 T.	Adagio, 2/4, F, 18 T.	Finale, 3/8, F, 29 T.	C141
19	61	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1762	Allegro, 2/4, F, 38 T.	Menuet, 3/4, F, 20 T. Trio, 3/4, B, 20 T.	Polonese, Adagio 3/4, F, 22 T.	Finale, 3/4, F, 41 T.	C142
20	62	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 3/4, F, 70 T.	Adagio, 2/4, F, 45 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, d, 16 T.	Finale, 2/4, F, 24 T.	C147
21	63	C	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, C, 46 T.	Andante, 2/4, C, 29 T.	Menuet, 3/4, C, 18 T. Trio, 3/4, a, 16 T.	Finale, 2/4, C, 26+24 T.	C148
22	64	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1763	–, 2/2, F, 50 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, d, 16 T.	Adagio, 2/4, F, 24 T.	Finale, 3/8, F, 43 T.	C149
23	65	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1764	Allegro, 4/4, D, 51 T.	Menuet, 3/4, D, 20 T. Trio, 3/4, h, 24 T.	Adagio, 2/4, D, 21 T.	Finale, 2/4, D, 18 T.	C150
24	66	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1764	Vivace, 2/4, F, 51 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, d, 16 T.	Adagio, 2/4, F, 24 T.	Finale, 3/8, F, 20 T.	C151
25	67	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, non tanto allegro 2/2, D, 62 T.	Menuet, 3/4, D, 16 T. Trio, 3/4, A, 16 T.	Andante, 2/4, D, 24 T.	Presto, 3/8, D, 25 T.	C152
26	68	A	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 3/4, A, 58 T.	Adagio, 2/4, A, 33 T.	Menuetto, 3/4, A, 16 T. Trio, 3/4, D, 16 T.	Finale, 2/4, A, 24 T.	XXII - C153 XLII E 143
27	69	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, D, 42 T.	Menuet, 3/4, D, 16 T. Trio, 3/4, G, 16 T.	Adagio, 3/4, D, 27 T.	Finale presto, 2/4, D, 20 T.	XXII - C154 Osek 104
28	70	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, F, 47 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, C, 24 T.	Adagio, 3/4, F, 46 T.	Finale presto, 2/4, F, 25 T.	C155
29	71	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 3/4, D, 74 T.	Menuetto, 3/4, D, 20 T. Trio, 3/4, A, 20 T.	Largo, 3/4, D, 31 T.	Finale, 2/4, D, 20 T.	C156
30	72	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	1762	Allegro, 2/2, F, –	Menuetto, 3/4, F, –	Andante, 2/4, F, –	Finale, 3/8, F, –	C119
31	73	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 3/4, D, 49 T.	Andante cantabile, 2/4, G, 23 T.	Menuetto, 3/4, D, 32 T.	Finale, 2/4, D, 33 T.	C120a
32	74	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro assai, 4/4, B, 42 T.	Menuet, 3/4, B, 16 T. Trio, 3/4, g, 18 T.	Andante, 2/4, F, 22 T.	Finale, 3/8, B, 35 T.	C120b
33	75	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, B, 39 T.	Menuet, 3/4, B, 20 T.	Andante, 3/8, g, 25 T.	Presto, 2/4, B, 28 T.	C121
34	76	F	3	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 4/4, F, 47 T.	Adagio, 3/4, d, 31 T.	Menuetto, 3/4, F, 24 T.	–	C122

	SýkD	調	楽章数	編成	作曲年	第１楽章	第２楽章	第３楽章	第４楽章	CZ-Pnm
35	77	D	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, D, 37 T.	Menuet, 3/4, D, 16 T. Trio, 3/4, G, 16 T.	Adagio cantabile, 3/4, D, 20 T.	Finale, 2/4, D, 23 T.	C123
36	78	A	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro vivace, 3/4, A, 60 T.	Adagio, 2/4, A, 18 T.	Menuet, 3/4, A, 16 T. Trio, 3/4, a, 18 T.	Finale, 2/4, A, 27 T.	C124
37	79	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, F, 44 T.	Larghetto, 3/4, B, 26 T.	Menuet, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, B, 16 T.	Allegro assai, 2/4, F, 30 T.	C125
38	80	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro moderato, 2/2, B, 18 T.	Menuetto, 3/4, B, 16 T. Trio, 3/4, g, 16 T.	Adagio, 2/4, Es, 29 T.	Allegro, 2/4, B, 32 T.	C126
39	81	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 3/4, F, 37 T.	Adagio, 2/4, d, 34 T.	Menuetto, 3/4, F, 28 T.	Finale, 2/4, F, 32 T.	C127
40	82	A	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Vivace, 3/4, A, 58 T.	Adagio, 2/4, a, 39 T.	Menuetto, 3/4, A, 28 T.	Finale, 2/4, A, 48 T.	C128
41	83	C	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 2/2, C, 49 T.	Adagio, 3/4, F, 22 T.	Menuetto, 3/4, C, 28 T. Trio, 3/4, C, 16 T.	Finale, 3/8, C, 27 T.	C129
42	84	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, F, 43 T.	Adagio, 3/4, F, 30 T.	Menuetto, 3/4, F, 16 T. Trio, 3/4, F, 20 T.	Finale, 3/8, F, 32 T.	C130
43	85	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, B, 44 T.	Adagio, 3/4, F, 20 T.	Menuetto, 3/4, B, 16 T. Trio, 3/4, B, 16 T.	Finale, 2/4, B, 36 T.	C132
44	86	A	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 3/4, A, 44 T.	Adagio, 6/8, a, 24 T.	Menuet, 3/4, A, 24 T. Trio, 3/4, D, 16 T.	Finale, 3/4, A, 36 T.	C133
45	87	C	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, C, –	Adagio, 2/4, C, –	Menuet, 3/4, C, –	Presto, 2/4, C, –	XLII E 149
46	88	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 4/4, F, –	Andante, 2/4, F, –	Menuetto, 3/4, F, –	Finale, 6/8, F, –	XLII E 135
47	89	B	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro moderato, 3/4, B, –	Andante, 2/4, B, –	Menuetto, 3/4, B, –	Finale, 2/4, B, –	XLII E 134
48	deest	F	4	2Ob., 2Hn., 2Fg.	–	Allegro, 2/4, F, –	Menuet poco andante , 3/4, F, –	Andante, 2/4, F, –	Scherzo, 6/6, F, –	XLII E 151